

「オンライン下でのアクティブラーニング授業について」

—甲南大学の事例を基に—

武田佳久

甲南大学 全学教育推進機構 共通教育センター
神戸市東灘区岡本8-9-1 658-8501

概要

本稿ではコロナ禍の影響による授業のオンライン化の中で、特にアクティブラーニング授業の実施形態や内容の変化について検証する。また主に甲南大学の事例を元に、実際の履修学生の授業に対する意識をアンケート、インタビューの両面で調査した。それらを元にオンライン下でのアクティブラーニング授業の課題や可能性について探る。

キーワード：アクティブラーニング，オンライン授業，ラーニングアシスタント，コミュニケーション

1. はじめに

甲南大学において 2014 年よりキャリア創成科目を担当している。主にグループワークを中心とした初年次のアクティブラーニング授業である。着任以来特に以下の点に特に力を入れて取り組んできた。

- (1)ワークショップを通じて新たな交友関係を構築する。
- (2)入学後できるだけ早い段階で改めて学生生活における目標設定をする。

(1)については 15 回の授業を通じて少なくとも 4～5 回程度のグループ変更をして実施。初対面の学生が話し合い協力しながら正解のない課題について意見交換し、ブラッシュアップしながらプレゼンテーションを体験するプロジェクト型授業を実施している。

(2)ラーニングアシスタント（以下 LA）を積極的に活用し、初年次学生にとってのロールモデルとなるよう質疑応答を行ってきた。LA 学生の希望者は年々増加しており、年間を通じて

LAとして授業参加した学生は本年度100名を超えている。コロナ禍におけるLA参加はオンラインへと変更された。活動の詳細は後述するが、希望者はコロナ禍においてむしろ増加の傾向にある。

2020年に始まったコロナ禍以降、アクティブラーニング授業においてもオンライン実施となり授業内容を工夫しながら上記(1)(2)について対応してきた。その中でオンライン下でのアクティブラーニング授業について受講生はどのように感じ、学んでいるのかを一度整理して今後の授業運営に生かしていきたいと考えている。

2. 先行研究や他大学の取り組みについて

2.1 先行研究について

2.1.1 コロナ禍の授業で本当に学べるのか

山路が行ったオンライン授業と対面授業の比較調査[1]において、対面がよいと答えた学生と対面の方がよいがオンラインにもよい点があると答えた学生の数は拮抗している。だが後者における更なる調査では就職活動等の時間が作りやすいとも答えており、オンラインは利便性があるものの、学びの本質から離れてしまっているとも考えられる。またコロナ禍において受講生の多い授業はその数が多いことに対して心理的圧迫を感じている学生もおり、そういった学生はオンライン授業がよいと回答している。これらは精神的に落ち着かない環境の中で、学びに集中できないことがひいてはオンラインでもよいとの回答に結びついていると考察することができる。

2.1.2 コロナ禍における学生の友人関係とコミュニケーション

山咲は[2]においてコロナ禍におけるオンライン上での友人関係の構築についてその難しさをいくつかの例を上げて示している。その中でSNSを通じて知り合うきっかけを得るケースが多いが、学生同士の言語能力の乏しさからそれ以上の関係に至らない場合があるといっている。相手の姿が見えないSNSでのコミュニケーションは非言語情報がないため友人関係構築の敷居が高くなった。この場合SNSから対面やZOOM等の非言語を含むコミュニケーションに移行出来ない場合は学生間の交友関係自体が狭いものになってしまう。

2.2 コロナ後のアクティブラーニング授業や学生支援

アクティブラーニング授業の内容や学生支援等これまで対面で行われていた内容はコロナ禍を経てどのように変化しているのか。また特徴的な他大学の事例を上げておきたい。

2.2.1 龍谷大学における事例

コロナ禍以前より同窓生を活用したメンターシップ制度を利用したキャリア授業[4]を実施している。コロナ禍後においてメンターである卒業生の来校、および履修学生の企業訪問が難

しくなったためリアルタイムのオンライン開催に変更して実施している。受講生が得る情報は対面に比べると変わったが、今まで来校することが難しかった遠距離の卒業生がメンターとして参加するなど新たな効果も生まれている。

2.2.2 明治大学における事例

明治大学[5]は就活に対する細やかな学生支援を行っており、在学生だけでなく高校の進路指導教員からも高い支持を受けている。これらは学生との面談を蜜に行い、そのニーズを拾って企画に反映してきたことが大きい。しかしコロナ禍においてこれまで行ってきた学生との面談機会の確保が難しく、以前ほど学生ニーズを把握することができていない。したがって就活サポート等の学生支援もやり方の見直しが必要となっている。

2.2.3 まとめ

全体像を把握する上で文部科学省の調査[3]によれば令和3年時点の大学等における授業の実施形態についてまとめている。この調査によると大学差があるものの97.4%の大学が半数以上を対面授業と回答しており、形態としてはコロナ禍以前に戻りつつあるという状況だと言える。但し、多くの大学が学部、学年において差があると回答しており、特に初年次対象の授業においては手厚く丁寧な対応をしていると回答している。コロナ後オンラインを意識した授業内容に変更したかについては、コロナ禍自体が想定外の出来事であったため、現時点で新しい授業内容に取り組んだという大学は少ないようである。

3. 甲南大学におけるアクティブラーニング授業の環境

3.1 コロナ禍以前（2019年）ラーニングアシスタントを積極活用

コロナ以前におけるアクティブラーニング授業では100名クラスに各5名程度のLAを配置して内容の充実を図ってきた。LAは基本的に当該授業の履修経験者が当たり、受講生の気持ちを理解し対面で授業サポートを行った。

3.2 緊急事態宣言初期（2020年）オンライン授業でのラーニングアシスタント活用

緊急事態宣言の元で100名を超える授業については基本的にオンライン実施となった。ZOOMを利用してアクティブラーニングするため、グループルームごとに担当LAを配置することにした。LA1名が複数のルームを巡回しながらファシリテートした。実際には100名クラスで10名程度のLAに参加してもらうことになり、LAの経験者が多数必要となった

3.3 緊急事態宣言後期（2021年）試行錯誤を繰り返す

教室での対面形式と同時にオンラインでもアクティブラーニング形式で授業を行った。開講した。LAについては対面担当、オンライン担当の2つ形態を用意し、オンライン担当のLAも教室内からログインしてもらった。それぞれグループに分けてワークショップを行った。オン

ラインを担当した LA からは対面でのワークより盛り上がりには欠け、積極的な発言も少ないとの感想を得た。

3.4 現在

履修者 150 名以下の授業では対面形式に戻っている。担当授業の大半は 150 名以下の履修者であり、教室内で一定の距離を取りながらという制約はあるが、ほぼコロナ禍以前の状態に戻りつつある。通常とほぼ変わらない授業を行っている。緊急事態宣言前後を通じて受講生並びに LA 活動を行った学生へのインタビュー調査を 5 章にて記載する。

4. 受講生へのアンケート調査

実際にキャリア授業を受講している学生の学習意識はどのように変化したか。アクティブラーニングを行う初年次のキャリア授業に絞って受講生のアンケート調査[6]を実施した。

アンケートは 1 年生を対象としたベーシックキャリアデザインの学部が異なる 2 クラスで実施し、同一の質問内容を導入部分でのプレアンケートと 13 回目のポストアンケートについて授業後に行った。

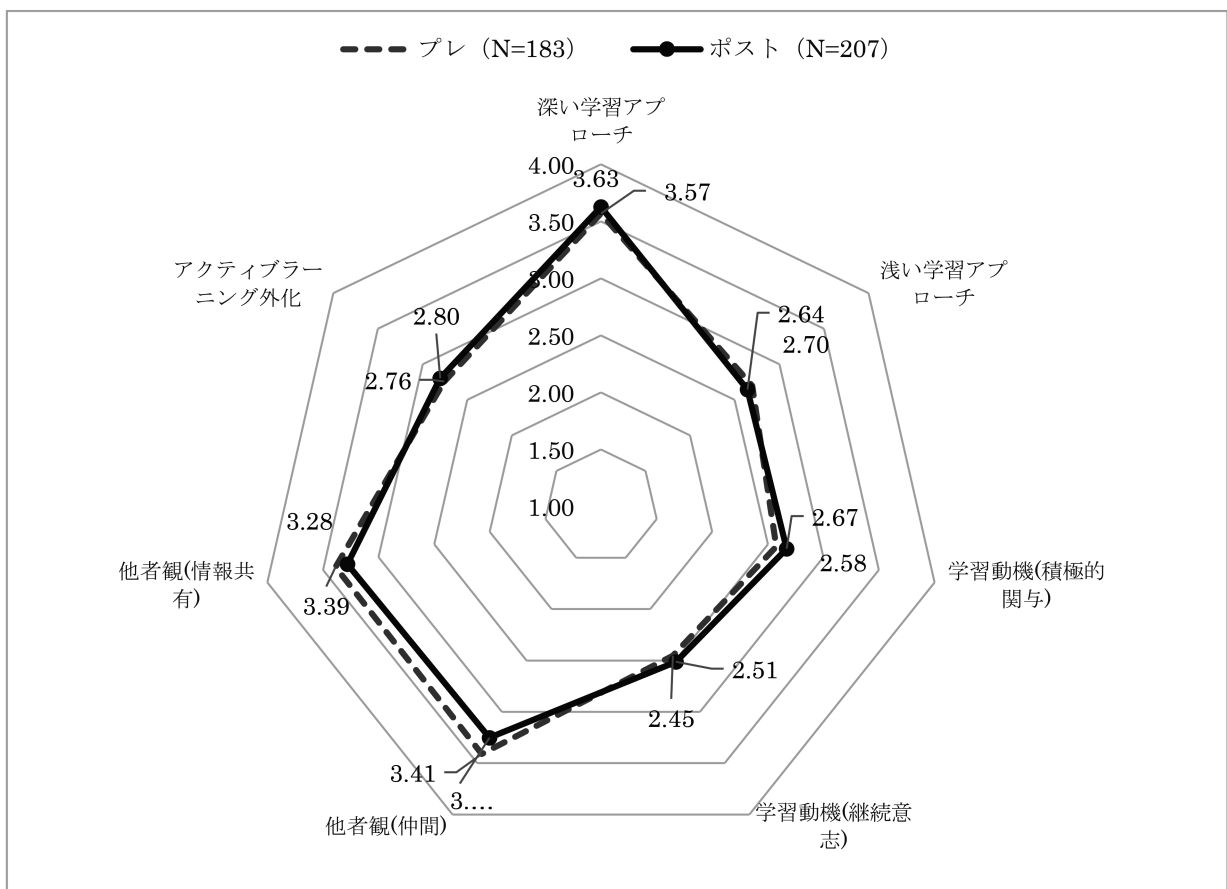


図 1 ベーシックキャリアデザイン科目での履修者アンケート（プレポスト比較）2021 年後期

授業時間帯は異なるものの2クラスともほぼ同一の授業内容であったので合算して集計した。これらの結果から見えるのは積極性や仲間意識に若干の変化があるものの授業に対する意識に特段の変化は見られなかった。また同様の意識調査はすべて対面形式で行った2019年にも実施しているが、こちらと比較しても大きな変化は見られない。このことから調査方法をインタビュー形式に切り替え、実際にオンライン授業を体験した受講生を対象にインタビューした。

5. 学生へのインタビュー調査

インタビュー調査ではアンケートでは質問されていない項目も含めて詳細に掘り下げてみた。ここではこれまでにオンラインでのキャリア授業を受講した学生数名とファシリテーターとして関わったLAにインタビュー取材した。

5.1 知能情報学部2年Aさん

「オンライン授業をどの程度履修したか」

緊急事態宣言の時期は履修した全ての授業がオンラインで行われた。週に14コマの授業を履修していて、そのほとんどがオンデマンドで実施された。英語の授業だけがリアルタイムで行われた。

個人的な意見を言うとオンデマンドは嫌いではない。学びの内容からしてリアルタイムの授業は対面と変わらないと思う。オンラインを好む理由は、自分のペースで動画をみることができからだ。また、自分が都合のよいタイミングでできるところも良い。例えば、集中できないと思ったら、少し後にのぼしてできるときにやるということが可能である。私は、自分の集中できるときに取り組めるのが一番良いと思う。

「オンラインで課題の量は増えたか」

入学した時にすでにオンライン授業だったので比較は難しい。課題の量が増えたかどうかはわからない。しかし、2回生になってからはずいぶん課題が減ったように感じる。1回生の時は非常に多く、特に共通基礎科目の課題が多かった。文系科目を多く履修したことも関係しているかもしれないが、文系科目はレポートが多いというイメージを持った。レポートを書くことに慣れていないためそれが大変に感じた。レポートでは内容をまとめたり、説明をしたりすることは苦手ではないが、感想を書くことが非常に苦手で、それが辛く感じた。

「授業での質問機会について」

質問に関しては、むしろオンラインの方がしやすいと思う。オンラインだけの授業の場合だと担当教員はMy KONAN（学生向けポータルサイト以下同）の質問機能を活用していると思う。私自身、対面授業中の質問となると手を挙げにくいと感じている。誰とも干渉せず教員に直接質問ができるという点で、オンラインのほうが質問しやすいと感じている。質問のしにくさは受講生の人数に関係なく、人の目があることや目立ってしまうことに対して嫌悪感を抱い

てしまうことが原因だと思う。

「オンライン授業での LA 参加の効果」

今期から LA 活動して初めて他学部のキャリア授業を見ることができた。そこで感じたことは文系学部の授業はどのグループも非常に話が盛り上がっていることだ。知能情報で私が所属していたグループはとても静かだったので、LA の先輩が介入することで話すきっかけをもらった経験がある。静かだというのは、話してはいるけれどあまり口数が多くなかったということだ。グループ全員がやる気がなかったわけではないが、何を発言していいのかわからず、自分の考えもまとまらないことでずっと黙って時々発言するという感じになっていた。LA の助言がなければグループワークは活性化していなかったと思う。

「キャリア授業を行うにはオンラインか対面か」

基本的には対面がよいと考える。但しグループワークでは周りの雰囲気の影響されるというのが、良くも悪くもあると思っている。他のグループの声が大きくて集中力がなくなったり、意見が聞こえてきたりするというのは問題だと思う。

ただ、盛り上がるということに関しては、周りが盛り上がっていれば「ちょっと発言しようかな」という積極性も生まれるのではないかと考える。

「オンラインと対面とでの受講生同士の距離感や人間関係について」

個人的な感想かもしれないが学部の特性も関係しているように思う。他学部で行っている自分たちで話合っグループを決めるというのはすごく難しいことだと思う。そういう意味では、オンラインの機能でメンバーが自動的に決まるというのはいいところかなとも思う。知らない人ばかりというのは別段気にはならない。距離感ということで感じるのは、ずっと目を見て話すというのは少し違和感のあることでストレスを覚える。

オンラインだと視線をそらしたり、そういった自然さがなかったりすることが少し話しにくい。

「オンラインで友人関係はできるか」

授業で関わった学生は「あの人が知っている」程度にしかになっていない。自分の学部がほとんど男子学生なので、そういった点が大きいのもかもしれない。仮に女子学生が半数程度いれば、話すきっかけにはなると思う。

「オンラインと対面のグループワークのやりやすさ」

話やすさという点では対面の方が圧倒的にいいと思う。例えば、オンラインでよく聞かれる「声が被ると聞こえなくなる」という事例も気にしなくていい。自身も何度か体験したがオンラインでのグループワークで沈黙が続いたあと話し出す時に発言がよく被って気まずい思いを

した。こういうことも話にくさにつながっている気がする。逆にオンラインでよかったなと思うこともある。メンバーの名前がすぐわかることだ。画面をずっと見ていることによって、自然と名前を覚えるということもあると思う。

「オンラインの長所短所」

実際にあったときの関係性に直接響いてこないと考える。一番の長所は場所を選ばないことだろう。そういうことでいうとハイブリット授業が最も大変だと思う。なぜなら、学内で場所を確保して、パソコンを開いて準備するまでの時間が非常にタイトだからだ。学内で Wi-Fi 環境が整っている場所を確保すること自体は難しくはないが、混雑している時間だと、図書館やサイバーライブラリは人が多く入れないことがある。個人的にはサイバーライブラリでリアルタイム授業を行っていた。曜日や時間によるが、3限、4限の時間は一番利用者が多かったと思う。サイバーライブラリに行くと、あと2人とか3人しか入館できない状態になっていることも時々あった。

5.2 経営学部2年Bさん

「オンライン授業をどの程度履修したか」

オンライン授業は現在も続いており、履修全体の半分くらい。緊急事態宣言の時よりはかなり減った。個人的には他の学生と話したいのでディスカッションがあるキャリア系の授業は履修するようにしている。キャリア授業でなければオンラインでもよいと思う授業はある。グループワーク等のディスカッションがなく、ひたすら話を聞くだけの授業なら対面でもオンラインでも内容や質にあまり変わらないのかなと考える。オンラインで質問したいことがあってもリアルタイムならチャットを使って、オンデマンドでも My KONAN で質問する機会はあるのでなおさらそう思う。誰かと話すという機会が全くないならオンラインの方が集中できてよいと思う。

「オンラインの授業のメリットはどういう点か」

オンデマンドならあると思う。課題に取り組む際、疑問に思うことがあった場合に動画だとすぐ戻して聴ける。リアルタイムで講義を受けているとあとで課題に取り組む際、My KONAN で質問したとしても翌週の課題提出に間に合わない場合があるので不安だ。現在オンラインで履修しているのはオンデマンドのみである。

「オンライン授業での LA 参加の効果」

グループでの話が本題から脱線したときに、戻してくれるというのは感じる。理系の学生からキャリア授業でオンラインになるとグループワークで話が盛り上がりず、ワークが進まないということが何度かあったと聞いて少し不安だった。しかし、経営学部対象のキャリア授業では全くそんなことはなく逆に話が盛り上がりすぎて脱線してしまうことが多々あった。こう

いう時 LA の先輩が回ってきてくれて話を本題に戻してくれた。また話が盛り上がっていないところは、LA のアドバイスによって議論が活性化する。また先輩と関わる機会が増えたことにより履修登録で困った際に LA の先輩に相談したりした。相談できる先輩が増えたことが LA のいてくれたおかげかなと思う。

「オンラインでコミュニケーションをとることのやりにくさ」

昨年リアルタイムでキャリア授業を受講した際、グループのメンバーが意図的にカメラをオフにしていた。グループに一人でもそういった人がいるとグループワークが盛り上がりずとも話しづらかった記憶がある。

「オンラインで友人関係はできるか」

個人的には友人関係はできると思う。話すきっかけができるので、次回対面であったときに、「〇〇さんだよね?」、「一緒に授業取っていたよね」というような話から盛り上がった経験がある。現在友人の中にはオンラインでのキャリア授業をきっかけにして出会った人もいる。

「オンラインでグループワークをもっとやりやすくするためには」

アイスブレイクの時間はオンラインだからこそすごく重要だと思う。時間もできるだけ長く取った方が良いと感じる。短時間だと距離感がつかみにくいと思う。日常的な会話を話せる時間をもっと多く取る方がよい。空いた時間を有効に使い、アイスブレイクを少し長めに取ることによりワークができると思う。

またグループワークの人数について、オンラインの時はできるだけ少人数にした方が良いと思う。一番理想は、1対1だが、3、4人くらいのほうがいいのかと思う。大人数になるほど話しにくく感じた。2人だと目の前の相手だけに集中して話すことができる。逃げ道がないので話さなくてはいけない環境におかれる。

「オンライン授業で課題は増えたか」

特に言語の授業の課題が増えた。2年生になり言語の授業はなくなったが、1年生の時はひたすら言語の授業の課題に追われていた。そもそも授業を行わず、授業自体が課題のような感じで、自分で教科書の問題を見て解くものや、英語の本を読んで感想を書くものがあった。

「授業の課題」

オンデマンドの授業課題で感想や気づきだと、例えば動画が4つ送られてきたとして、そのうちの1つを見れば解くことができるということもあった。この場合他の動画を視聴しなくても課題ができてしまうのは、どうなのかと思う。

「オンラインの長所と短所」

時間を有効に使えるようになったことが大きい。隙間時間に検定の勉強をしたりすることができる。現在簿記の勉強をしているが、オンデマンドであれば、翌週までに動画を見ればよいと考え、今週は検定の勉強に集中しようというようなことができる。

オンラインは、通信状況に左右されてしまうことが問題だと思う。教員によっては通信状況が悪くて ZOOM にログインできないというメッセージを送っても返信がなく、その日の授業が欠席になったりすることもあった。またメールが返ってきても、環境を整えていないのが悪いという返信だったりする場合もある。

それから身体的なことだが目が疲れるようになった。モニター画面を長時間見ているので、とても目が乾く。

対面の短所はオンラインの長所の裏返しになるが、時間を取られてしまうことだと思う。自宅通学の環境からすると通学に 2, 3 時間はかかるため、その時間がすごくもったいないと感じる。無駄な移動時間があることが対面の短所だと思う。

5.3 知能情報学部2年Cさん

「現時点でオンライン授業をどの程度履修しているか」

緊急事態宣言中はすべてオンライン授業だったが、現在はオンラインが 6 割で対面が 4 割程度となっている。この場合のオンラインというのは、自分の場合すべてリアルタイムとなっている。オンデマンドで行われるオンライン授業は選ばなかった。自分の性格上、いつでも受けられるとなれば先延ばしにしてしまうからだ。先延ばしにしないためにも、リアルタイムの方が私に合っていると思う。但しリアルタイムで授業を受けていて受講生が 50 人ぐらいだと、画面上は何画面かになって自分の名前が表示されないと積極的に授業に参加している感じがなくなる。それらを考えるとオンラインでは積極的にはなれない場合もある。対面授業が最も積極的になれる。個人的にはオンライン授業は学びの質が落ちると考えていて好きではない。対面で受講する方がクオリティは高いのではないかと思う。

「リアルタイムでのオンライン授業は集中できるか」

大学内で受けていれば集中できるが、自宅で受講しているとプライベート感覚から抜け出せないため、少し集中力が欠けるかなと思う。また学内で受ける場合も落ち着ける場所を探すのに苦労することも多い。

「学内でオンライン授業を受講する場合の環境について」

大学内でオンライン授業を受講する場合、i-Commons (学生会館) の二階をよく使う。多くの学生が利用しているが意外にうるさくなく、真剣に受講している学生が多いように感じる。かなり集中しやすいかなと思う。但し、満席の場合も多いので少し早めに行って席を確保するようにしている。

「オンライン授業での LA 参加の効果」

前提としてグループワークの授業であれば、対面のほうがもちろんやりやすい。私の受講したキャリア授業では、グループワークの場合 4 人で 1 グループという感じで行っていた。ほぼ全員が初対面でなおかつオンラインということもあり、なかなかディスカッションが進まなかったり少し無言の時間が続いたりもしていた。しかし、そのルームに LA の方が入って的確なアドバイスをしてくれたおかげで活性化することができた。LA は何人か巡回してくれたが、どの LA が来てもそれなりに活性化したように思う。

「オンラインのやりにくさ」

どうしても画面を通しての関わりなので、相手の情報が少なく表情が対面に比べてわかりづらい。また、視線をどこに合わせたらよいのかといった点で距離感が取りにくいと感じる。人見知りの人だとやりにくいだろうと思う。

また、自分自身も含めて周りの友人が一番課題だと思うのは通信環境についてだ。学内は割と通信環境はよいのだが、自宅で受講する場合は問題になる。自宅の Wi-Fi の状態が悪い時、ZOOM が切れたり、音声途切れたり、聞きたかったところが聞けなかったりという問題が何度かありかなりストレスを感じた。

「オンラインで友人関係はできるか」

オンラインで意見交換したり、会話が弾んだりしたとしても、実際会ってみるとまた別な感覚だと思う。オンライン上で友人関係になれたかと言われたら、それは友人関係ではないという人の方が多いと感じる。

「オンライン授業で課題は増えたか」

自分たちの学年は入学したときからオンラインであるため比較はできない。授業課題について言うと課題があるのはオンラインの授業ばかりだ。課題はその日の授業の復習のような課題が多く、文章力アップ以外あまり意味を感じない。

以上は実際にオンラインでのアクティブラーニング授業を受講した学生の意見である。では実際に授業のサポートを行っていた LA の意見はどうであろうか。実際に LA としてオンライン授業で活動した学生へのインタビューを行った。

5.4 LA（経営学部3年生）

「LA の立場から見たオンラインと対面のグループワークのイメージ」

両者については、まずは別物だと考えて活動している。単に形態が違うということだけでなくコミュニケーションの質がオンラインと対面ではまったくの異なると思う。例えばグループの成立の仕方について考えてみる。対面であれば声を掛け合ってグループを組むこともあった

が、オンラインの場合は自動的にグループが割り当てられる。男女が混在するグループといったこともオンラインでは瞬時に組むことが難しい部分もある。声を掛け合うといったことも小さなチャレンジだと思う。そういった部分がないのはコミュニケーションの質にも関わってくるように思う。また、オンラインの性質上誰かが話しているときにそれを遮って話すことができない。タイムラグが発生するため、独特の間が生まれてしまう。こういったことがワークの活性化を阻害していると考える。

「オンライン下で集中してグループワークできているか」

集中ということだけならオンラインの方が適しているように思う。しかし、グループ内で会話がなく静かな状態となった場合、リラックスして会話のキャッチボールができるかと言えばそれは難しいと思う。適度に冗談が出るくらいの状況が好ましいのではないか。オンラインだと同時話すことが少し難しいのもマイナス面だ。また静かだからといって課題に集中できていると言われればそれも違うと思う。適度なアイスブレイクをすることでアイデアや視野の広さが変わってくる。

「オンラインでワークが活性化していないグループへの対処法」

この点はすごく苦労した。活性化していないまでも、間を空けつつ発言しているグループはある。そのような状態でも会話が続いているなら、議論自体は進んでいると捉えるかどうかで苦慮した。判断がつかないとこちらも話しかけづらい。例えば、誰かが発言すると会話が止まるとする。そのタイミングで LA が「大丈夫？」と話しかけるとグループ全体が沈黙してしまう。そこから LA が再び盛り上げるのも工夫が必要なので、そこがすごく難しい。タイミングを誤るとグループワーク自体に影響を及ぼしてしまう。

「オンライン下での LA の効果」(メリットデメリット)

メリットは、対面に比べるとほとんどないに等しいと思う。先程も言ったが、むやみに LA が介入することでメンバー同士の議論や思考をも止めてしまうこともある。思考が止まるというのは、LA が話すことで受講生が LA の話に誘導されてしまう点があると思うからだ。ただ、相対的には LA がいないと発言しないグループもあったので、LA がいないよりかはいたほうが良いという印象である。

「オンラインのコミュニケーションについて」(学生と LA 間のコミュニケーション)

オンライン上では、ほとんど個人的な話をする機会もなかった。対面授業では、教室全体が適度な騒音があるため、声を出して笑ったりすることも珍しくない。しかしオンラインではそれが一層目立ってしまう。日本人の性質上なのか、静かな場で目立つことを敬遠して黙り込んでしまう。同時に笑ったりする状態になれば違った雰囲気になりそうだが現状では難しくそうである。また徹底して行ったのはカメラをオンにしていない学生には、オンにしていない理

由を尋ねた上でカメラをオンにしてもらった。

「適切なグループワークの形態について」

オンライン環境でのグループワークにおいてもっとも効果的な人数は何人グループかを考えたとき究極はペアワークなのではないかと思ったこともあった。ペアワークだと1対1のコミュニケーションとなり、必然的に一人当たりの発言量はグループワークより多くなるはずである。他の授業においてオンラインでペアワークの実績があるが、相手に負担をかけないように意識するため、自分から話そうと過度に意識する学生が何人かいた。見ていると何となく会話は続いているがあまり内容がないといった印象だった。また強制的に発言させられている感じもして、お互い気持ちよく会話できているのか疑問に思った。

「アイスブレイクの時間はどの程度取るべきか」

時間よりも質を上げるほうが良いと思う。短い時間であっても楽しいアイスブレイクもあれば、考え込んでしまうものもあり、意見が出ないとグループは活性化しない。

オンラインではグループの人数も大きく影響すると思う。基本的にアイスブレイクは大人数になればなるほど難しい。単に誰かが発言しているというだけではなくアイスブレイクの質を求めなければならない。アイスブレイク中に LA が必要かどうかにおいては受講生が主体なので、グループワークの質が保たれているのであれば LA は必要ないと考える。1年生の場合は友人も少なかったり、まだ大学生としての対人関係について不安をもっていたりで、手探り状態でコミュニケーションを取っているところもあると思う。その点を考えると初対面同士のグループワークにおいてアイスブレイクはとても重要だと思う。

「オンラインの長所と短所」

長所は移動時間の短縮に尽きると思う。時間が有意義に使えるし満員電車での不安もないのは大きい。但し、アクティブラーニングにおいて長所は感じられない。

短所は、甲南大学の良さが生かされないところだと思う。少人数教育、他の学生とコミュニケーションをとるという点で、友人たちとコミュニケーションを取れないのは問題だと思う。授業の途中からオンラインに変更になる場合であれば、ある程度顔見知りの学生もできているかもしれないし連絡を取り合うことも可能だと思う。但し1年生の特に初期の段階は、誰も情報共有できる友人がいない状態から始まる。こういった場合は孤独や不安を強く感じるのではないかと思う。すでにオンラインの対応も2年目になるので親しい友人がいないまま2年生が終わる学生もいるかと思う。LA の立場としてそういう学生をできるだけ作らないようにしていきたいと思っている。最後に LA や受講生のシステムトラブルも見えて多かった。こういったトラブルは単に時間が消費されるだけでなくワークの盛り上がりも難しくなる一因だと思う。

6. オンライン下におけるアクティブラーニング授業の現状分析

これらの意見からコロナ禍におけるアクティブラーニング授業について主に以下のような問題点があると思われる。オンライン下においてもある程度友人関係に近い状態は構築できるが、一旦ログアウトすると構築した関係が終わってしまう。そのため授業後のコミュニケーションに広がり期待できない。またメンバーの通信環境によってはディスカッションの途中で途絶えてしまうケースもある。こういう状態ではグループワークの進行上、メンバー同士の信頼関係ができにくい。したがってグループで何か成し遂げようとした時、対面に比べてハードルが高くなるのではないか。また受講生は自身が受講する段階で対面とオンラインではコミュニケーションの質が違っていると考えており、オンラインでのアクティブラーニングにある種のあきらめを感じている。

そしてグループワークだけでなくペアワークにおいても1対1のコミュニケーションだと逃げ道がなく常に何かを話題を探して話さなければならないといった不安要素を感じている学生もいる。

7. まとめ

オンライン授業ではアクティブラーニングの効果は限定的であり、最適な形態とは言い難い。逆にオンラインの特性を生かしながら、うまく住み分けし対面授業では難しいと思われる点を補完すべきだと考える。例えば授業の内容によってはオンデマンドが効果的なケースもある。特に時間の制約や複雑でわかりにくい内容はリピートしながら学ぶといったこと可能となるためである。但しオンライン授業では受講生全員が同じ空間にいないので学生自身の授業への取り組み姿勢やモチベーションが重要となってくる。したがって初回の授業からいきなりオンラインで実施するのではなく、事前に大学での学ぶこととは何かをしっかりと説明し、受講生からの理解した上でオンライン授業に向かうべきだと考える。またオンライン授業でコミュニケーションするにあたって、ルールやマナーがある程度確立されると、ストレスなくコミュニケーションできるのではないかと考える。

オンライン授業でのアクティブラーニングは心理的不安をできる限り排除しながら、コミュニケーションの質を高めていくことが寛容である。お互いの信頼関係があつてこそ、オンライン環境での質の高いコミュニケーションが成り立つ。そういう点ではオンライン授業でグループワークを行う場合は、授業内でのルールやマナーを確立させる必要がある。また授業に関わる教員や先輩 LA はオンライン環境でのケーススタディをしっかりと行い、多様な場面で適切な関わり方を身に付けておくべきである。特に初年次対象の授業においては挨拶や声掛け等のケアを心掛け、受講生の心を解放させたいと考える。今回改めてオンラインによるアクティブラーニングの可能性を考える機会を持てたことは、今後のキャリア授業を進める上で非常に貴重な体験となった。

謝辞

終始熱心なご指導を頂いた共通教育センター長高龍秀先生、アンケート調査でご協力いただいた千葉美保子先生に心から感謝の意を表します。またアドバイスをいただいた篠田有史先生をはじめとする教育学習支援センターの皆様、本研究の趣旨に賛同し快くアンケートやインタビュー調査に協力いただいた学生のみなさんにも御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

- [1] 山路茜 コロナ禍で学生はどう学んでいたか
- [2] 山咲博昭 コロナ禍における学生の友人関係とコミュニケーション
大学教育学会 課題研究「大学教育における質的研究の可能性」グループ編著 山田嘉徳・上畠洋佑・森朋子・山咲博昭・谷美奈・山路茜・西野毅朗・服部憲児 ジアース教育新社,2021
- [3] 文部科学省 令和3年度前期の大学等における授業の実施方法について,2021
- [4] 龍谷大学HP <https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-8615.html>
- [5] 大学通信HP <https://univpressnews.com/2020/12/09/post-6993/>
- [6] 甲南大学ベーシックキャリアデザイン科目後期履修者アンケート,2021
- [7] 甲南大学 授業改善アンケート2019年～2021年